

復員後の職業 花巻市新興製作所勤務の後農業

(岩手県 田辺 壮久)

シベリア抑留の歌

岩手県 及川新蔵

昭和二十年八月九日、ソ連軍は日ソ不可侵条約を一方向的に破棄してソ満国境を越え侵攻、満州（現中国東北部）は戦場のるつぼと化した。当時極度に戦線が拡大し兵員兵器とも不足していた日本軍は惨敗し無条件降伏、武装解除されて捕虜の身となった。

直ちに日本に送還すべき日本軍兵士を、ソ連は帰すと偽りシベリアに連行し、二年から五年、特殊な人は十数年もの長きにわたって強制労働に従事せしめた。特に入ソ当時の食糧、被服、住居環境は劣悪を極め、加えて厳しい寒さと苛酷な労働の強制により、連行された六十数万の一割以上の死亡者が続出、内地帰還後もその後遺症による死亡・疾病は後を絶たなかった。

その死亡者の数の多さは激戦地並みと言われている。

また、ソ連の終戦間際の火事場泥棒的な参戦により当時の在満民間人も多大な打撃を受け、特に老人、婦女子の逃げ惑う様は言葉に言い尽くせない惨状を呈していた。子連れの女は両手に子供の手を引き、背中に乳呑み子を負い、髪を落として丸坊主となり顔に墨を塗ってトボトボと歩く様は何とも言えない地獄絵であり、疲れ果て、子を置き去りにするのを目の当たりに見た我々は、それを救い得なかった無力さを今悔やむのである。逃げるのに足手まといになる老人は家に置き去りにされ、一人ポツネンと寝ていたお婆さんに「兵隊さん、助けて」と懇願されたあの言葉もいまだ耳の奥に残っている。

いたいけな子供たちが残留孤児となり、五十数年経てなお生みの親を捜す姿は涙なしには見られない光景なのだが、しかし当時の戦争の記憶も風化、戦争とは何なのか、一体何だったのか、そして平和の有り難さを語る人達が少なくなった。願わくば稚拙な短歌と短文が戦争のむなしさを思い起こし、平和の有り難さを

感得する一助たり得れば幸いである。

ソ連はなぜ日ソ不可侵条約を一方的に破って満州、樺太、千島に侵攻し、揚げ句の果て六十数万の日本人を捕虜としてシベリアに拉致したのか、いまだ解明されない「なぜ」の部分が多い。大体十日程しか戦闘していないのに、軍人ばかりでなく非戦闘員から十五、六歳の子供まで、員数が足らないからというだけで無理やり貨車に詰め込んで連れ去るなんて狂気の沙汰としか言いようがない。しかもその時の彼等の言葉は「ウラジオ・ヤポーニヤ・ダモイ（日本人はウラジオストックから帰す）」、「スコーラ・トウキョウ・ダモイ（早く東京に帰す）」と、将校から一兵卒に至るまで言い続け、日本人を信用させたあたりは全く驚嘆に値する。

こういうことができたのは、ロシアに革命によるスターリン政権が誕生し、肅清、弾圧、シベリア流刑と暗黒政治が絶え間なく行われ、国際間の信義とか個人の人権など全く顧みられなくなって麻痺状態にあった

からだという人もいる。そういう状況の下で何百万の流刑囚をシベリアに送り込み強制労働させてきたソ連当局は、日本兵を同じ状態に置いたからといって何の違和感も感じなかっただろうし、手際よくだまして連れ去る芸当もそれなりに訓練済みだったと言えるだろう。

いずれにしても被抑留者にしてみれば甚だ迷惑至極で、特にかの地で還らざる人になった方々は本当に気の毒だったと言わざるを得ない。

高き塹 望楼の機銃 バラ線と

蟻の這ひ出る 隙もなかりき

捕虜収容所は高さ四メートルほどの塹が巡らされ、百メートルくらいの間隔で望楼があり、監視兵が見張っていた。バラ線のところでしゃがんで雪を取ろうとしただけで射殺されるということもあり、入ソ当初、暴動、逃亡を恐れてか特に厳しかった。

石灰を こねて作りしお供えに

食えないみかん のせるシベリヤ

自分たちの食う物さえないのだからお供えにする餅なんてあるはずがない。でも、器用な人がいて、正月には石灰でお供えを作った。みかんの色は石炭をどうにかして作ったという。

東（ひんがし）の 空の下には 祖国あり

今日元旦ぞ 遙か拝みぬ

生きていることを知らせる術のない閃われの身、東を向いて手を合わすほかなかった。

もみ半分 玄米半分のごはんでも

米だ米だと はしゃぐヤボスキ

ソ連は日本軍を武装解除するや、直ちに満州にあった食糧、被服、機械器具等利用できそうなありとあらゆる物資を満州全土の貨車を全部使って運び去った。入ソ後我々の使った道具の中に日本製の物が大部分あり、それをソ連兵が自国製のごとく自慢するのがおかしかった。

粃のまま支給された収容所では、処置に困って昭和初期まで使われた粃磨臼（粃を玄米にする最も原始的な機械、兵隊の中にそういうものを作れる人がいた）を作って玄米にしたが、粃が半分混じっており、でもその一粒一粒を久しぶりに味わう米の感触に感激しながら食べたものである。

カートンキ シュバーに手套 防寒帽

ボールを持って やつと立ちおり

カートンキとはフェルト製の防寒靴。シュバーとはほとんど緬羊の毛のついたままの防寒外套で、すごく重かった。手套とは軍隊用語で手袋のことで、防寒大手套となれば綿入れの大きな手袋であった。

二年目の冬は防寒装備が行き渡って凍傷にはならなかったが、その重さで動けなかった。大体あんなに寒いところで屋外作業をしても、能率のいい仕事ができるわけがなかった。

ねちを巻く 方法知らずソ連兵

時計が死んだ 直せと迫る

時計を日本兵から巻き上げたものの、当時の時計には電池式など全然なく、その都度電頭を巻き時間を合わせなければならなかった。しかしソ連兵にはそういうことを知らない兵が多く、取り上げられた時計の扱い方を身振り手振りで教えなければならぬことが多かった。

日本の精密機械の良さを知っていたからであろう、彼等はむやみにこういうものを欲しがった。

この柱 あっちの壁も 白づくし

国は赤でも 人が好き

別に立派な塗料を塗るといふわけではないのだが、皮をはいだだけの丸太の柱や横壁の材木に石灰を塗らされた。白は清潔感があるということなのか、暗いところが明るくなるということなのか、その意図はわからない。

建物に白い建物が多いような気がしたが、私の気のせいだけかもしれない。

心込め 千人針に縫ひこみし

十円の札 ちり紙となり

これ大事 思つて居つたお札でも

シベリヤに行きゃ ただの紙きれ

下痢したら 防寒外套の綿出して

それでふくより外なかりけり

何事があつてもお金がなければ困るであろうと親達が千人針に縫い込んでくれた十円札、しらみの巢になりながらも大事にしてきたお札だったが。

激しい下痢になつて、腹巻を破つたり防寒外套の綿を出したりして始末したこともあつた。

敗戦国の通貨なぞ異国では一文の価値もないものである。満州にいた頃の十円は大金で結構使えたはずだったのに、いまだに惜しいような気がする。

夏の夜は 暗いところが二、三時間

冬とは逆に日の長きこと

夏の日の 穴ぐら兵舎 蒸し暑し

べとつく汗で へど吐く臭ひ

つかの間の夏逃さじとシベリヤの

ブヨ群れ作り襲ひかかりぬ

シベリアだとて、つかの間だが夏もあって、暑いな
と思ったこともあった。我々の入っている兵舎は半地
下で、冬は防寒上いいのだが、夏は何とも言われない
不潔な建物なのである。めったにないことなのだけれ
ども珍しく雨に見舞われて、板に土を乗せただけの屋
根から雨漏りし兵舎の中がずぶ濡れになり、水をかき
出したことがあった。暗いからいいようなもの、明る
かったら何ともやり切れない光景だったと思う。

その長い夏の夜、日が沈んでから外で寝転がって話
し込み、「十一時だ、寝よう」といったとき、まだ薄
明るかった記憶がある。でも、その短い夏にブヨが大
量に発生するのだから驚くほかない。

毛じらみの すみかであると 毛をそりぬ

またからわき毛 俄か床屋が

しらみが発疹チフスの伝染源であるとのことで入浴
できるようになってから、衣服の熱気消毒と局部やわ
きの体毛を剃り落とすように言われた。順番待ちに行
列を作り、立ったまま片手で「サオ」を引っ張って毛
を剃ってもらう様は、やはりシベリア抑留以外では見
られない光景だと思う。

一、二級 三級四級と体格も

食事もわかる おかしい国

「働かざる者食うべからず」これが共産主義の鉄則
で、これによって仕事も食事も分けられるという建前
になっていた。働かすためにたくさん食べさすとい
うのならわかるが、その逆だから何か動物の調教から来
た発想のような気がする。これも入ソ後半年から一年
経ってからのことで、入ソ当時の給与は全く話になら
なかった。

特別の職のある人優遇す

稼ぐ外なし　なも出来ぬ吾

スターリン　こっちの棟もスターリン

あっちの棟も　又スターリン

建物という建物にスターリン

顔でハイハイ　口でペロ出す

汽車に迄　スターリンが飾られる

神か仏か　吾知らねども

物云えは　くちびる寒し　ソ連国

影でコソ／＼　云ふ外はなし

独裁者というものはいつの時代でもそうなのかもしれないが、強烈な個性の持ち主のスターリンは、弾圧と懐柔そして稀に見る個人崇拜を強要した指導者だったと言える。ありとあらゆるところに彼の肖像画を飾って、その見えない幻影に服従するよう自国民も我々も要求された。絵心のある人達の中には、労働に出な

いで彼の顔かきやスローガン書きをして楽しした人もある。

氷点下四十度なる日もありき

さすがに作業終わり告げらる

窓と云ふ　窓の総ての内外に

白き水の　へばりつきおり

零下二十五度で「けさ暖かいんじゃない」、そんな会話も聞こえる。透明であるべきガラスは、内外に分厚い氷の塊がへばりついて全然明かりが取れない。

青木云ふ歌手おり　歌を聞かせける

歌では腹のたしにならざり

現在も活躍している青木光一が私たちの収容所にいた。劇団を作り歌や寸劇を見せてくれたが、かの国の方々が喜ぶような出し物が多かった。これは入ソ後一年くらいしてからで大分落ちついてからのことなのだが、空腹感を埋めるにはまだまだ程遠い給与であっ

た。

何程に寒きところと問わるれば

凍りし糞を手で捨つるとこ

後架とは 土に穴掘り 橋渡し

ずらっと並んで用を足すなり

(後架―便所のこと)

糞の山 次々凍り うずたかし

ボールで砕き 手でほうり投ぐ

便所は三メートルくらいの穴を掘り、その上にバラツクを建て、橋板に穴をあけてそこに並んで用を足す。冬は落ちた糞がたちまち凍りその穴めがけて山になった。そのときは、その便つぼに入ってボールで突き崩し、手套(綿入れ手袋)をかけて手でほうり投げ、それを車に積んで処分した。ろくな物を食ってないからにおわないのかも知れないが、とにかく溶けるということがないのであった。

麦の皮 高粱の皮 粟の皮

これがパンです 喉を通らず

無産党だったと称す 兵おりき

彼のみ一人 暖衣飽食

盗みには 盗む以外に手立てなし

捕虜の悲しさ 同胞相食む

中西というかつて無産党員だったという兵が将校にかわって権力を握り、民主化運動の先頭になり将校など反動という人達を弾圧するようになった。ソ連当局に取り入り、作業もせず立派な服装で丸々太って収容所内を威張って歩いていた。各収容所で似たような人がおり、あまりにも皆から反感を買った人は引揚船から海に投げ込まれる事件もあったと聞く。

機関車が 氷を巻いて走りおる

よくぞ鉄輪 凍りつかず

シベリアは何といっても冬が勝負である。当時石炭

を焚いて走っていた列車は、機関車の周りが氷の塊が走っているような感じなのだ。

口すすぎ それを手にうけ 顔洗ふ

水は貴重な 命綱なり

食器云ふ物 洗ふもんではありません

なめてこすって 吊るし置くだけ

三里五里 物の数ではなかりけり

水汲みの櫛 走る雪原

風呂と云ふ 名のつくところ 桶一つ

お湯を貰って 垢落とすとこ

日本の国は素晴らしい。春夏秋冬季節の変化があり、緑豊かで至るところコンコンと清水が湧き、せせらぎがある。我々の抑留されたシベリアは、冬が去れば短い夏があるだけで、九月には小雪がちらつく。水がないとなれば何里も先の川に水汲みの櫛や馬車を走

らせなければならぬ。食器は缶詰の空缶、それを何か月も洗わないのだが、半地下の洞窟は暗いからあまりよく見えないし、見えても水がないからどうにもならないのだ。

立ちしませ 気の遠くなることありき

凍死する人 あの様なるか

計算の出来ない露兵多かりき

出門の前 地団駄をふむ

作業に出る前、また帰ってから、衛門で必ず人数の確認をソ連兵が行った。まだ明けやらぬシベリアの寒さは絶頂に達するが、きつちり並んで待つ日本兵を数えきれないで、いたずらに時間を空費する兵隊が多かった。足踏みしたりおしくらまんじゅうして薄暗い中開門を待つのも何とも嫌なことであった。当時のソ連兵の教育程度は本当に低いもので、日本人が十年も学校に行つたと言つても全然信じなかつた。

このノルマ 果たさざる者 飯食えず

暗き真夜中 とほ／＼と行く

仕事をごまかしたからと監督が言い、引き返して働かされ真夜中に帰ったことがあった。暗いから顔は見えないが、誰も無口で憔悴しきっていた。

まむしなる 仇名で呼びし監督を

五〇年経し 今に忘れず

ホラダワイ ダワイダワイにプステリー

スコップ振り上げ 怒鳴る監督

ダワイ(働け) プステリー(早く)。早く稼げ、もとと稼げ、監督の怒声が響く。聞けば彼らも囚人が多かった由。いくらかでも成績を上げて刑期を早めたい思いがあったであろう。

いかにして監督の目をごまかしてノルマを上げた風に見せるか、彼らとの知恵くらべの毎日であった。あの目付きの鋭い碧眼紅毛の白系露人は「まむし」と呼び、いまだに忘れがたい。しかし彼もスターリン圧政

時代の悲しい囚人だったのかもしれない。

名も聞かぬうちに旅立つ兵あわれ

明日は吾身と 思ふ毎日

私もある日突然転属になって、一人で違う大隊に配属になった。そんなこと珍しいことでもないし、第一皆疲れて他人のことなどより自分自身を守ることに懸命なのだから、突然動かなくなった人がいても他人事だと思っただけと思う。戦争で折り重なる死体を見ているせいもあるかもしれない。

ロシア語で最初に知ったダモイなる

うその塊 今も腹立つ

目隠しをした列車に乗せられて

行先知らぬ 旅の半月

白々し 東京ダモイ 地獄行き

降り立つところ 凍てつく大地

真つ黒な有蓋車に二段ベッド、ぎゅうぎゅう詰めで横になったまま足も伸ばせない。でも「東京ダモイ（東京に帰す）」の言葉にだまされて皆おとなしくしていた。停車をすれば引込線で一日か二日過ごすのも珍しくなく、貨車が止まれば一斉に降りて線路の上で用便した。その頃はまだ紙があったからだろう、線路の周りに紙が点々と散らばっていたが、だんだん紙もなくなり、我々もソ連人並みにお尻を拭かなくなった。

「海だ、海だ」と騒いだこともあったが、それはアムール川で、そのうち、朝日を背にして汽車は西へ西へと走った。降ろされてびっくり、大地は一面アイスバーン……十一月初めのことであった。

しらみ取り 之も日課の一つなり

一〇〇匹以上 取りしことあり

給与が悪くて衰弱しきっているのに、しらみや南京虫に悩まされ続けた。列車の中では暇なので少しの明かりを見つけてしらみ取りを一所懸命やった記憶がある。人間が死ねば死体からしらみが逃げ出すこと、し

らみが生き血しか吸わない虫であることなどは、シベリア抑留以外ではめったに体験できないことだと思

入れ墨のアンチャンすごむ事ありき

戦車兵等の たち悪い奴

なけなしの物をかすめて時計をば

四つも五つも かける露助奴

満州に侵攻したソ連兵のうち最もたちの悪かったのは戦車兵だったと言われる。彼らは弾薬凶器の検査と称して身体検査から持ち物検査を徹底して行い、時計や万年筆など目ぼしい物は全部取り上げた。

痔を病みて 苦しむ様は地獄絵よ

寒風の中 赤き腸出す

痔を病む人は本当に大変だったと思う。あの寒さの中で脱肛というのだろうか、お尻から真つ赤な腸を出して苦しんでいる兵がいた。食い物が穀物の皮ごとだ

ったり皮ばかりみたいなものだから、余計便秘するのだ。あの人がどうなっただろうか。果たして生きて還つただろうか。いまだにあのときの光景が忘れられない。

かゆかゆや 夜めくら チフス 肺炎と

命つなげぬ 病はやれり

夜盲の中隊ありき 寝ずの番

立ちて便所へ案内する役

薬は本当に薬にしたくともなかったみたいで、麻酔なしの手術も行われたし、栄養不良からくる夜盲症の人達の中隊、疥癬中隊などもあって、やや健康者がその介護にあたりたりした。疥癬は皮のやわらかいところに出るのが普通だろうけど、重症となれば全身にひろがって、入浴の様を見たら皮のはがれた兎さながらであった。二十代の血氣の人がかかるはずのない病気がはやって、次々無念の死を遂げたことを思えば胸が痛むのである。

足の先 帰りて見れば 水ぶくれ

火傷の如く 痛き凍傷

鼻の先 頬からひたい 手の甲と

凍傷のため 皮はげ落ちぬ

オチンチを 出す氣力なしそのまんま

用足し死にし 兵もおりたり

凍傷 水ぶくれをば 鉢にて

切りてヨーチンつけしままなり

凍傷は恐ろしい。構わないでよくと次々腐るといふ。ズボンの中で小便をして半身凍傷となり亡くなった人もいた。編上靴（革靴）のまま零下三十度の作業場に駆り出され、その日のうちに凍傷になった。生身を麻酔なしで鉄で切られた痛さは一生忘れられないが、でも日本の軍医だったから命を助けてくれたと思う。

空きつ腹　かかえて眠る　悲しきよ

見る夢誰も　食う夢ばかり

シベリア抑留の話をすれば食うことと寒さ、そして強制労働となる。あの地で死んだ戦友がいかに腹いっぱい食べる日を夢見て逝ったのかと思えば哀れでならない。

朝七時　真夜中のよな感じなり

八時出門うす暗き中

午後三時　そろ／＼と夜忍び寄る

その暗き中　帰るあたわず

白樺の皮を燃やして取る灯あかり

食事分配無くてはならず

シベリアの冬の朝は遅く、夜は早い。労働は八時間、ノルマを果たさなければなお働かねばならない。暗がりの中、缶詰に白樺の皮を燃やして明かりを取った。

ひもじがるソ国の人の略奪で

吾等の給与　塩湯のみなり

ソ連もドイツとの戦争で疲れきっていた。民間人が収容所の糧秣倉庫を襲いかつさらっていくことも珍しくなく、塩鰯を煮たらしい塩湯だけのことも多かった。

食ふ話　つばを呑みこみ　食ふ話

腹くちる日の夢見語りぬ

吾が里の　おいしきものを　挙げぬれば

ぼた餅おはぎ　夢の又夢

あまりの食事の少なさに食い物の話に花が咲いた。そして「帰ったら一番最初にあれを食うんだ」といった話になった。何を見てもそれが食い物に見えるのはあの境遇になってみないとわからないと思う。

銃剣で　突かれながらも　火に寄りぬ

入ソ当時の軽装の時

殺すなら 殺してくれと 火に寄りぬ

気絶する程 痛き寒さに

編上靴へんじょうかはきたる兵は 吾一人

総てを捨てて 夏衣なる故

私たちはソ軍と戦闘したので、武装解除されたときは武器弾薬以外ほとんど何も持っておらず、夏衣のままであった。そのまんまシベリアに連行されて収容所到着、間もなく炭坑の労働大隊に転属になった。普通外套に編上靴で零下三十度のところで作業させられたときは、殺されてもいいと思つて火に寄つて行つたことが忘れられない。

しかし世の中何が幸いするかわからないものだ。そのとき凍傷になつて四十日作業に出なかつたことが生きて還れた大きな要因だつたと思つている。

軍医さん 女だてらに肩章の

軍服を着て ひげが無いだけ

診断は お尻の皮を手でつまみ

脂肪なければ 四級となる

暖房なき 寒い廊下で素っ裸

軍医の診断 受くる屈辱

立ちしまゝ肛門の穴見ゆるなり

医者の検診 受くるヤボスキ（日本人、日本

兵）

ソ連の軍医の診断の目的は、労働に耐え得るかどうかを見定めるためで病気の診断ではなかつた。だからあの寒さの中で真っ裸にして行列を作らせ、軍医だけはストープのそはで腿とか尻の皮をつまむだけという全く人をばかにしたような診断であつた。臀部の肉が削げてしまえば立った姿でお尻の穴が見える。一糸まとわぬ丸裸にされたから嫌でも他人の尻の穴まで見ることになる。

白樺の皮の煙で真っ黒に

すゝけし顔よ 目ばかり光る

半地下の兵舎には電灯がないから皆一斉に白樺の皮を燃やして灯とした。もうもうたる煙で顔は真っ黒になり、すごい形相となった。

逃亡を図りし兵のあわれさよ

引き廻されて 何処かへ行く

憲兵隊、警察等で勤務した人の中に逃亡を企てた人が多かった。しかし捕まって縛られたまま収容所内を引き廻されて何処かへ連れていかれた。もっと奥地のひどい収容所にやられたとの話であった。

後ろには 銃を持ちたる兵おりて

羊の如く 追わる毎日

ソ連に連れて行かれた当時の警戒は特に厳しく、隊列の前後左右に弾をつめた銃に着剣したソ連兵がついて歩いた。瞬時も隊列を離れることのできない囚われの身であった。

今日十人 次の日になりや十五人

死人の数が噂されたり

霊安所 名はよけれども裸なる

冷凍の人 積んで置くとこ

カラコロと 積みし冷凍人間の

車は何処へ行きしか知らず

骨と皮 肉なし死体を積み上げて

材木の如く あつかふ彼等

人ソ後半年くらいの間はその劣悪な環境に順応しきれないであたら若い命を落とす人がたくさんいた。シベリアで亡くなった人の七五％はこの時期に集中していると言われる。生きた人間さえ人間扱いしないのだから死人が物体と思ったところで不思議はない。柩に入れないどころか裸のままなのだ。処置に困って夜陰にトラックで運び去るのを見たことがある。何処へ運んだのか今でも気がかりでならない。

墓掘りの使役に出でしことありき

コンクリの如 凍れる大地

吾入る穴かも知れず墓掘りは

厭な中にも 尚いやなこと

吾掘りし 墓に入りし人識らず

成仏難し 穴浅くして

墓掘りの場合、掘る場所に石炭を燃やして凍土を溶かしながら掘った。しかし凍土はあまりにも深く、溶ける土はほんの少しで、一日がかりでもいくらかも掘れなかった。結局埋葬したといっても雪や氷をかぶせただけというものが多く、春ともなれば肉食動物の餌食になったものが少なくなかったと思う。

今ロシアでは日本人墓地の整備をすると言っているが、何も無いところに墓標を立てる気なのだろうか。

見え見えの意図が隠されているようで何とも不可解に思えてならない。

シベリアで 故郷を恋しと 眺めたる

小窓の中の 冬の月かな

シベリアでは窓という窓に氷がへばりついて外なんか見えない。これは歌にするための便法で、冬の月も星も外に出ないと見えない。

他人のこと 思ふひまなど 更になし

極限の中 吾生くるのみ

頼れるのは己のみ、誰も助けてくれる人はいない。誰の世話をすることもできない。皆条件が同じで、各々今日この日を行き抜くことしか考えなかった。

このスープ 一杯で命つなげとは

捕虜とは云えど あまりのことと

岸壁の母・端野イセさん

昭和五十二年七月十六日、私たち石頭予備士官学校十三期生の戦友による全国大会が東京・読売ランドで開かれた。

その大会の来賓席に一人のお婆さんが腰かけており、その方が「岸壁の母」の歌のモデルの端野イセさんであることが司会者から紹介された。端野さんの息子新二君は、士官候補生として石頭で訓練を受けていたという。昭和二十年八月九日、ソ連軍の越境参戦により、われわれの部隊も非常呼集となったが、当時新二君は荒木連隊緒股大隊に所属、牡丹江の東方磨刀石でソ連機甲部隊と激突、その戦闘によって緒股大隊は大隊長以下七百人の戦死者を出したといわれている。

その後イセさんは一人息子新二君の帰りを待ちわびて、引揚船が舞鶴に着くたびに訪ね、息子の消息を聞き出すべく通ったのが藤田まさと先生の耳に入り「岸壁の母」の歌になったといわれている。私たちの戦友会はその後菊地章子さんによる「岸壁の母」の歌の熱唱があり、懇親会となってもイセさんは終始笑顔を絶やさず、息子の同年輩の戦友達をわが子を見るような目で眺めておられたのが忘れられない。

翌日一緒に靖国神社に参拜、私たちとの短い出会いはその日で終わりとなった。昭和五十六年一月十日休

調を崩して入院、同七月一日入院先の中島病院で逝去されたとのことであった。行年八十一歳。お葬式には在京の石頭会員有志が参列、弔辞を捧げたと戦友会報にあった。

作曲家吉田正氏と私

私は昭和十九年十月、満州琿春一三一二五部隊甲斐隊に入隊した。私たち初年兵の教育係に吉田正という上等兵がおり、分隊長と一緒に起居、演習にも出て我々を指導していた。

二十年の正月元旦、我が甲斐中隊は中隊長も交えてのさやかな祝宴があった。その時、中隊長が吉田上等兵に「何か歌え」と命じ、吉田さんは朗々と「誰か故郷を想わざる」を歌い、その声がよく歌のうまかったのが忘れられない。

吉田さんは暇があれば五線紙を出して楽譜を書き込み、爪先で拍子を取りながら歌を口ずさんでいた。二十年三月、硫黄島玉砕の報が入るや「硫黄島玉砕の歌」を作詩作曲して、私たちに教えてくれた。そのほ

かにも吉田さんに教えられた歌が数曲あったと思うが全然覚えていない。

楽器などハーモニカさえない軍隊で、どうしてああいうメロディが出来上がるのか全く不思議でならなかった。シベリア抑留から帰り、「異国の丘」の歌が流行し、その作曲者が初年兵時代五カ月余り起居を共にした吉田正上等兵であることを知り、全く感無量であった。

今テレビに出て来る吉田正氏は、若いころの小柄で丸顔は昔のままながら、やっぱり年取ったなあと、自分のことを棚に上げて懐かしく見ている次第である。

【執筆者の紹介】

学歴

岩手県立花巻農学校卒業

満鉄農業技術者養成富拉基農業修練所修練

入隊

満州琿春一三一二五部隊甲斐隊

昭和十九年十月入隊後幹部候補生となり

石頭予備士官学校に転属

武装解除 横道河子

抑留地 ライチハ十九收容所

復員 昭和二十二年四月二十四日

復員後職業 農業

(岩手県 田辺 壮久)

シベリア抑留記

岩手県 菅原 登喜雄

終戦なのか敗戦なのか

時は昭和二十年八月十四日の昼頃である。「召集令状だ、とうとうきたぞ」、第四部落の千栄郷の川村昭一君が馬を走らせながら叫んで行った。(その後本人はこの地で死亡したと聞かされた)

この地は満州国北安省綏稜県昭北開拓団本部落名豊秋郷として第一第二部落に分割されていた。本部より二キロ手前に大和郷の第三部落、本部の奥に千栄郷の第四部落があった。戦争は激しく一人一人に召集令